
無関心の災厄 — サイプレス

早村友裕

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

無関心の災厄 — サイプレス

【Nコード】

N2193N

【作者名】

早村友裕

【あらすじ】

オレにはちよつと変わった同級生がいる。ソイツは、ちよつとぼーっとしている、一見無邪気な17歳男——きっとソイツはオレを非日常と災厄に導く張本人。

- - : 真実のプロローグ（前書き）

本作品は、花小説企画（<http://juhee.web.fc2.com/hanasyousetsu.html>）で書き下ろした「無関心の災厄——シラネアオイ」と続編「無関心の災厄——ワレモコウ」の続きに当たります。

ここからでも読めますが、もしよろしければ前作、前々作からご覧ください。

- - : 真実のプロローグ

この扉を開けてしまえば、きっと、オレの日常は灰燼と帰すだろう——そんな事は分かっていた。

分かっているオレは一步踏み出した。

だから、ここから先の物語はすべてオレの責任なのだ。

大丈夫、覚悟はこれまで何度もしてきた。

大丈夫、日常はこれまでもないに等しかった。

大丈夫、大丈夫。

何度も、何度も自分に言い聞かす。

約束時刻の3分前、約束の桜崎駅南口にはへらへらとした笑顔の男が佇んでいた。

制服でなくカジュアルな私服に身を包んだオレのクラスメイトは、遠くからずっとオレの方を見ていたようだ。学校から直接駅に向かって坂を真っ直ぐ下ってきたオレの姿をいったいどのあたりから視認していたかというのは聞きたくもない話だが。

目の前まで近寄って初めて、夙夜はオレに話しかけた。

「おはよう、マモルさん」

「ああ、おはよう夙夜」

これまでは気付かなかったが、コイツはこういうところに非常に気を使っていると思う。

ちゃんと、人間として会話しておかしくない距離まで近づいてから、普段人間が目の前の相手に話しかけるくらいの声量でオレに話

しかけている。普段夙夜が大きな声を出して遠くの人に呼び掛けるこそをしなかったり、遠くから呼んでも返事しなかったりするの、その辺の加減が難しいせいなんだろう。

そうやって生きていくのがどれほどじれったい事なのか、オレには見当もつかない。夙夜にとってみれば、他の人間なんて、オレから見た、年を取って視覚聴覚が弱くなった人間よりもずっと会話が困難なイキモノだろうから。

それでも、人間のフリをするケモノは嬉しそうに笑う。

「ねえねえ、俺の方がマモルさんより早いので珍しくない？」

「……オレの覚えてる限りでオマエが待ち合わせに間に合ったのは今日が初めてだよ」

「そうだった？」

「事実だ。本当に珍しい限りだよ。ヤなことでも起こらなきゃいいけどな」

はあ、と一つため息。

すると、夙夜はへらりと笑った。

「大丈夫だよ、マモルさん」

その言葉で、オレの中の緊張は少し薄れる。

「そうだな」

——大丈夫、隣にコイツがいるんだから。

オレはまだ何も知らない。

先輩たちによって名づけられていく登場人物たちの役割を。

『無関心の災厄』——香城夙夜

『ゴッドフアーザー
名付け親』——篠森スミレ

『無表情美人』——白根葵

エヴァンゲリスト
『災厄の伝道師』——望月桂樹

そして、オレは『口先道化師』 柊護。

これ以上にまだ必要な人間は多数いて、出番を待っているにもかかわらず。

人口過密な舞台の上に、次々とみな乗り込んでくる。

だからオレが舞台から降りる道なんて、とつくに閉ざされていたんだぜ？

01：無表情美人と組織と物語のはじまり

あと3分か。

腕時計を確認し、きよろきよろ、と辺りを見渡すと、見慣れた姿が目に入った。

「先輩」

「あつ、マモルちゃん、シुकヤくん、おはようなのです」

ひらひらと手を振った先輩は、今日は私服のようだ。確かにバイトの制服でこんな人通りの多い駅で待ち合わせすれば、目立つことこの上ないだろうが。

春らしい、花柄ティアードチュニツクのワンピースにデニムジャケット。ウエスタンなブーツの靴音も軽快にこちらへと駆けてきた。頭の上でふよふよ揺れる髪に気を取られていると、先輩が腰のあたりに突撃してきた。

久しぶりの感覚に、息がとまる。

「先輩、突然タツクルかますのはやめてくださいって。そのうちオレの腰が折れますから」

「そんなことないのです」

にこにこ嬉しそうに笑う先輩の笑顔にまたも毒気を抜かれ、ふう、とため息一つで腰のあたりから引き剥がした。

「で？ 当の白根はどうした」

「来てるよ、ずっと」

夙夜がにこりと笑い、指差した先には、相変わらず無表情の白根が佇んでいた。

いったいいつからそこにいた？

研修旅行の時と同じ、黒のシャツにデニムというシンプルな服に身を包んだ白根は、近くにあった駅の時計が丁度午前10時ぴったりと指すと同時に、俺たちの方へと歩み寄ってきた。

「時間になりました。柊護さん、香城夙夜さん、篠森スミレさん。本日はありがとうございました」

「いや、いいんだけどよ、ここからどっか移動でもするの？」

「徒歩5分の場所に組織の所有するマンションがあります。その一室に移動しようと思うのですが、よろしいですか」

組織の所有するマンション。

もうその言葉だけでオレの手に負えぬ事態である事を実感する。

オレは心の底から、今日一日が無事に終わる事を願った。

白根が案内したのは、駅から歩いてきっかり5分の場所にある、目測20階以上はあるつかという高層マンションだった。

携帯端末でロック認証し、オレたち3人を中へ迎え入れると、業務用かと思紛うような大きいエレベーターが待っていた。それを下れば、先ほどまでいた場所を『下界』とも呼びたくなるような景色が広がっていた。

ふっと下をのぞくと、あまりの高さにくらりとする。

こんな場所、人間の住む高度じゃねえよ。

「こちらへどうぞ」

再び携帯端末で部屋のロックを解除した白根が、通路の一番端の扉を開き、オレたちを中へと迎え入れた。

中はかなり広い。

少なくとも、女子高生が一人で住む部屋ではない。

「どうぞおかけください」

白根が指したのは、玄関の正面の扉を開けたところにあるリビングのソファ。

いったい何人で暮らすつもりなのか、軽く数十畳はあろうかと思われるリビングキッチンに、ベッドと呼んでも差し支えないくらい大きな3人掛けのソファが二つ、硝子の天板を張ったテーブルとその向こうの壁に埋め込まれた大型テレビを囲むように並べられて

いた。

先輩が嬉しそうに駆けて行って思い切りソファにダイブした。ちよつと先輩、スカートめくれていますって！

「すごいのです！ ふかふかなのです！ マモルちゃんもシユクヤくんもはやく来るのですう！」

興奮した様子でソファの上を跳ねる先輩を見て、となりの夙夜も駆けだした。

マテ、夙夜、先輩はなんだか見た目的に許せるが、お前はちよつと――

止める間もなくふかふかのソファに飛び込んだ夙夜。

嬉しそうに先輩と二人、跳ねまわっている。

「夙夜ああ……」

ノーテンキな友人の名と共に、オレは大きくため息を吐きだした。白根はキッチンに入って、どうやら茶の準備でもしているようだ。香りからすると……紅茶だろうか。それ以上の事は、庶民であるオレには分からない。

とりあえずソファの上を跳ねまわる二人から出来る限り距離を置き、ソファの端に腰を落着けてみる。

と、思ったら自分の体が沈みすぎてコケた。なんだこのソファ。

「どうぞ」

白根がテーブルの横に跪き、硝子の天板に一つ一つ、湯気の立つカップを並べていく。

よくわかんねえ名前の毒とかはいつてねえよな？

おそろおそろの手にとって口にしたが、特に妙な感じはしなかった。隣で苦い苦い、と言いなながら砂糖をどさどさ投入していた夙夜も最終的には口にしていたから大丈夫なんだろう。

オレたちが出された紅茶を含んで一息ついたところで、白根はすつきりとしたアーモンドの瞳をオレたちに向けた。

そして、何の前置きもなく語りだした。

「先日の『シリウス』という識別称を持つ珪素生命体^{シリカ}の消滅、そし

て京都における一連の事件を組織へ報告させていただきました。香城夙夜さんの行動と覚醒、そして柊護さん、貴方の動向についても」唐突に始まった白根の解説に、否が応でも緊張が走った――のは、オレだけだろうな。

先輩は聞いているのかいないのかおいしい紅茶に夢中だったし、夙夜は相変わらずへらへらと笑っていた。

くそう、分かっていたとはいえ、緊張感のないメンバーだ。

そんなオレのピリピリした空気にも、夙夜ののほほんとした空気にも、先輩の我関せずな雰囲気にも全く迎合することなく、白根は淡々と続けていった。

「貴方達はあまりに深く珪素生命体シリカと関わり過ぎました。そして、放置するにはあまりに強すぎる適合者コンパイでもあります」

関わりたくて関わったワケじゃねえけどな。

なんて言っても遅い。

覚悟。

逃げ出さないよう、再びオレはその言葉を心の中で繰り返す。

「世間一般的に珪素生命体は、一度でも珪素生命体シリカと関わりをもった人間のもとに再び現れる、と言われていますが、正確には少し違います。珪素生命体シリカは、『異属』を消せという唯一最大の命題を遂行するために、仲間の残滓に集まるという性質を持っているのです」珪素生命体シリカは、他の珪素生命体シリカが消滅した場所に現れる。それは、消滅した後に残った方を消すためなのだ。

オレは、オレたちはその命題を、身を持って証明していた。

「二人共、あまりに多くの珪素生命体シリカの痕跡をその身に宿しています」

「……」

断言するような白根の口調に、返す言葉はなかった。

「本来ならば、組織の人員として取り込むのが定石です。しかし、香城夙夜さん、貴方の特異な経歴のためにそれは敵いませんでした」

夙夜の経歴？

それを聞いた夙夜は、へらりと笑った。

「あ、もしかしてアオイさん、オレの事聞いちゃった？」

「いいえ」

「そうなんだ」

少しほっとしたような顔をした夙夜。

コイツ、また何か隠してやがるな？

「おい、夙夜」

「ごめん、マモルさん。それ、また今度ね」

「……」

この野郎、普段はマイペースのくせにこんな時ばかり先手を取りやがって。

非常に腹立たしいが、白根の話の先が気になるのも事実、オレはしぶしぶ矛先を収め、白根に視線を戻した。

白根は再び淡々と告げた。

「結果的に組織から出された結論は、『情報の共有』です」

「情報の共有？」

「はい。現状、貴方たちの関わった事件について、判明していない事実が多すぎます。『シリウス』『ヒナタ』……そして『リリン』

『イズミ』」

その名に、どきりとした。

梨鈴はともかく、なぜ白根が『イズミ』の名を知っている？

「名前を持っている、っていうのは以前人間と関わっていたっていう証拠だよ。オレたちじゃなくても、イズミが元々いた場所で聞けば、誰か知ってるはずだ」

「……」

夙夜の野郎、オレの思考まで読み始めやがった。

「……まあ、いい。それで？」

オレは白根に続きを促した。

「組織は、貴方たちの持つ情報が開示される事を前提に、組織に組み込むことなく現状説明許可申請と特別協力者申請を受理しました」

白根のアーモンドの目がオレたちを順に見た。

そう、ここまでがプロローグ。

なんて長いプロローグ。

そして、白根が続きを告げた瞬間それは終了し、物語はようやく動き出す。

「柊護さん、香城夙夜さん、篠森スミレさん」

白根がオレたちの名を呼ぶ。

淡々と、静々と、粛々と。

「珪素^{シリカ}生命体保護組織『^{イナリ}稻荷』への協力を要請します」

02 : 覚悟と電話と病院と

稲荷^{イナリ}。

その名には聞きおぼえがあった。

なぜか、オレの頭にはあの朱色の無限回廊が蘇った。

「……イナリってのは、この間行ってきた『伏見稲荷』とかとなんか関係あるんだよね？」

語尾が震える。

「はい。『稲荷^{イナリ}』は日本古来の宗教組織を母体とし、珪素生命体^{シリカ}を研究・保護する事を目的とした組織です」

政治組織でも、警察組織でもない予想外の力の介入に、オレの脳ミソはショート寸前だった。

正直、全く考えていなかったと断言してもいい。

言うに事欠いて宗教組織。

要するに、組織の母体は神社ってコトなんだろう？

ぐるぐると頭の中が混乱していく。

神社、稲荷、キツネ、珪素生命体^{シリカ}、保護、研究。

「待ってくれ、白根。ちょっと頭の中を整理させてくれ」

額に手を当て、じっと床を見つめながら。

汗をかく季節でもないのに、背中がじつとりと湿っていくのが分かった。

稲荷神社の歴史を即答した白根。伏見稲荷で遭遇した望月桂樹^{モチツキケイキ}。

何より、白根に向かって京都は組織のお膝元、と言ったのは他でもない、自分だったじゃないか！

「だいじょうぶなのですか？ マモルちゃん」

先輩の声ではっとした。

ぱっと顔を上げると、少し悲しそうに笑う夙夜と目が合った——
コイツがこんな表情をしている時は、たいてい後ろめたい事がある

時だ。

「夙夜、一つだけ答えやがれ」

「なあに、マモルさん」

「オマエ、白根の組織の事……『稲荷』のこと、知ってやがったな」

「うん、ごめんね、マモルさん」

ああ、もう最悪だ——災厄だ。

オレは大きいため息をついた。

何か新しい事が始まるかと思いきや、いつもどおりじゃねえか。

ビークール、口先道化師。

そこでもうやく肩の力が抜ける。

落ち着いたところで、オレの隣に座っていた先輩が首を傾げた。

「アオイちゃん、どうしてワタシまで呼ばれたのですか？　ワタシはリリンちゃんが消えた時も、シリウスくんがいなくなった時もいなかったはずです。何でなんですか？」

「篠森スミレさんに関する情報は、知らされておりません。ただし、監視の人員の選定はすでに始まっていると聞き及んでいます」

「先輩にまで監視がつくのか?!」

オレは思わず叫んでいた。

「うわあ、スミレ先輩も俺たちとおそろいだね！」

「おそろいですう」

「お揃いですう、じゃないですよ、先輩！　お前も喜んでんじゃねえよ、夙夜！」

もう一度、大きなため息。

ああもう、ここはやっぱりオレが話を進めないと何も始まらないんだろうな。

「で？　その『稲荷』ってのは何だ。誰がいつ、どこに、何を目的に作ったんだ？」

ようやく調子が出てきたオレに、白根は淡々と返答する。

「『稲荷』が組織されたのはいまから67年前、創始者は千木良秀^{チギリヒデ}和博士^{カス}です」

「千木良秀和？ それ、珪素生命体を作った千木良博士の」

「息子にあたります」

「！」

おい、待て、いまオレ、何気にもものすごい事実を聞いてないか？
珪素生命体を作った千木良晴良生物学博士、そしてその息子が設立した保護組織『稲荷』。その母体は稲荷神社、ときたまんだ。

でかい話過ぎて信憑性を疑う——が、よく考えたら相手が白根だ。コイツ自身も騙されているというわけでない限り、嘘をつくほどの器用さは持ち合わせちゃいないコイツがこれほど淡々と虚言を吐く事はないだろう。

再び思考停止しそうになった頭を抱え、オレは苦悩する。

これまでの白根を知るオレにとっては、不気味なほどにぺらぺらと組織についての情報を語る行為は警戒するに値する。

「もう逃げ場はねえって事だよな」

つまり、『稲荷』とかいう組織はオレたちをとりこみにかかっている。

ここまでの情報を開示された上で逃げられるものなら逃げてみる、と言われているような気がした。

と、その時。

ぴりりり、とその場に電子音が響き渡った。

「携帯の電話機能か？」

「あ、俺のだ」

夙夜がごそごそとポケットを探りだす。

「オマエの携帯端末が鳴るとこなんて、初めて見たぜ」

「ワタシもですう」

「俺も初めてかも」

この時代に、しかも一人暮らしで、携帯端末の電話機能を使わずにどうやって生きてきたのか、驚くような返答をして、夙夜はポケットから携帯端末をとり出した。

そして、着信画面を見た夙夜は硬直した。

見た事もないような無表情でじっとその画面を見下ろしていた。
着信音が鳴り響いている。

「夙夜？ どうした？」

聞くと、夙夜は画面に視線を釘づけにされたままポツリと言った。

「……ごめん、ちょっとだけ電話してもいい？」

「ん、ああ、いいぜ」

自分の部屋でもないのにオレが返答し、夙夜はごめんね、と言ってソファを立ちあがった。

広いリビングの端によつて——だからオレたちの聴力を過小評価しているだろう——聞こえないつもりなのか、普通の声で電話し始めた。

とはいえ、わざわざ盗み聞く趣味もない。

それでも、なんとなく、叔母さんが、病院が、という単語がいくらか耳に入ってきた。

いやな予感がする。

焦った様子で電話を終えた夙夜がパタン、と携帯端末を閉じてこちらに戻ってきた。

「どうした？ 夙夜」

オレが聞くと、夙夜は珍しくくらいに焦りながら言った。

「えーと、ちょっとごめん、おばさんが怪我したみたいなんだ。す

ぐ、行かなきゃ」

「珂澄さんが？！」
カスミ

夙夜の叔母の香城珂澄さん。
「ウジョウカスミ」

先輩がバイトしている花屋の店長にして、国家権力（自称）だという彼女に、シリウスの事件のときにはオレもお世話になっている。
「どこだ？」

「桜崎の総合病院だつて」

「だったら歩いて10分くらいだな」

どうしてだろう、この時オレは夙夜並みのカンを発揮した。
どうしても夙夜についていかなくتهはいけない気がした。

「オレも行つていいか？」

「ワタシも行くのです。店長が怪我したんだったら、ワタシも行きたいのです」

「うん、分かった」

夙夜が頷いて、オレと先輩はソファから立ち上がった。

「白根、悪いんだが緊急事態だ。話の続きはまた改めて、ってことになるが、いいか？」

「構いません。ただ、今回ここで話した事は」

「他言無用つってんだろ。大丈夫だ。そこにもここにもある神社が率先して珪素生命体^{シリカ}を保護する組織を作ってるって、誰に話したら信じてもらえんだよ」

そう言い残して。

オレたち3人は白根のマンションを飛び出し、珂澄さんが運ばれたという桜崎総合病院へと向かった。

覚悟。

オレがそう呼んできたモノは、きっと世間一般的に見たらちっほけなもんだっただろう。

自分自身で選んだ、なんて言いながら、すべて周囲に流されていただけだった。

それでもオレが折れなかったのは、隣にマイペースと先輩がいたからだ。

だから、もしオレの隣に誰もいなくなったら、オレはいつたいうするんだろう、なんて考えてぞっとする。

そんな事はきつとないはずだ、と言い聞かせながら――

03 : 病室の既視感（デジャ・ヴ）

隣にいて、こんなにも夙夜の感情が伝わってくるのは初めてだった。

へらへらと笑いながら何を考えているのか考えていないのかわからないマイペース、それがいつもの夙夜だというのに。

いまの夙夜は、きつとオレでなくとも分かるくらいに焦っている。病院は目の前に迫っていたのだが、夙夜はそわそわとしている。これではどう見ても挙動不審だ。

「落ちつけよ、夙夜。らしくねえぞ？」

いつもならオレが夙夜に言われる台詞を投げかけてやると、夙夜ははっとしたように立ち止った。

「あ、うん、そうだね。ごめんね」

そして、まるで耳でも澄ますように静かに目を閉じた。何をしているのかは、すぐに分かった。

長い付き合いだから。

先輩を見ると、にこりと微笑み返してくれた。数秒後。

次に目を開けた時、夙夜はいつもの夙夜だった。

「うん、怪我は大丈夫そうだけど、早く行ってあげたいな」

いまの数秒でどの何の会話を傍受したのか聞く気はないが。

「じゃあ、やっぱり珂澄さんのところまで急ぐのですう」

先輩がにこにここと笑って、オレたちはまた歩き出した。しかし、オレは気づいていた。

オレが怪我をした時に片鱗を見せた『ケモノ』が、全く姿を見せないことに。

それは、やっぱり、オレがケモノに鎖をつけた張本人だから、つて事になるのか？ ああケモノが顕在化するのは、オレが絡んでい

るから……？

自分の想像にぞつとしてオレはぶるぶると頭を振る。

それよりいまは、珂澄^{カスミ}さんだ。

病院に到着して受付をスルーしようとした夙夜を止め、一応形だけでも部屋番号を聞いておく。

面会謝絶だとかそんな事はなかったが、面会者として携帯端末のIDを控えられた。

真っ白な壁に囲まれた清潔な病院の廊下を、珂澄さんの病室へと向かう時、夙夜は静かに尋ねた。

「……ねえ、マモルさん」

「何だ？ 夙夜」

夙夜はオレの一步前を歩いていて、その表情は見えなかった。

「もし……もし俺がさ、マモルさんの力を借りたいって言ったら、助けてくれる？」

「は？ オマエが？ オレの力を？ 逆だろ？」

「そんなことないよ。俺はマモルさんがいないと何にも出来ないんだ」

「……っ」

だからそのホモくさい台詞は以下略っ。

病院内にあり得ない大声を喉の奥で辛うじて飲み込み、オレは大きく息を吐いた。

「当たり前だろ、オレが何度オマエに助けてもらったと思ってんだよ」

「ありがと、マモルさん」

にへへ、と笑った夙夜の顔になんかいらつとしたので額でもはたいてやるうかと思ったが、どうせ避けられるのでやめた。

その時、ちょうど先を歩いていた先輩が立ち止まり、病室の扉を開ける。

「失礼します、なのですっ」

ぺこりと一礼して病室に入った先輩の後から、オレと夙夜が続いた。

部屋は想像より広く、ベッドは二つあったが一つは空っぽだった。清潔な白基調の部屋は薬の匂いが充満していて落ち着かない。

何より、あのエネルギーに満ち溢れた珂澄さんとこの簡素な病室が似つかわしくなく、図らずも胸が騒いだ。

「夙夜くん、来てくれてありがとう」

「こんにちは、コーノさん」

夙夜がにこりと笑った。

窓際のベッド脇に佇んでいた男性が振り向いた。夙夜につられるようにして柔らかに微笑んだ彼は、オレと先輩の姿に気づいて首を傾げた。

「こんにちは。ええと、夙夜くんのお友達？」

おお、びつくりするほど優しいそうだ。

夙夜と並んでたら、オレが思わず連続で額をはいてしまいそうなほどに間の抜けた笑顔。強大だと言われたら信じてしまいそうに、空気が似ていた。

「こんにちはなのです。花屋『アルカンシエル』のアルバイトをしている篠森スミレです」

先輩がぺこりと頭を下げる。

「あ、どうも、丁寧にありがとうございます。河野克也コウノカツヤです」

慌てて相手の男性も頭を下げた。

「はじめまして。夙夜ヒイラギマモルの同級生の柊護ヒイラギマモルです。よろしくおねがいします」

「こんにちは、マモルくん」

珂澄さんと同じくらいの歳だろうか。なぜ珂澄さんの病室に？

そんな疑問が伝わったのか、当たり前前に言おうと思っていたのかからないが、河野克也コウノカツヤと名乗った男性はにこにこと笑いながら続けた。

「僕は珂澄さんの同僚だよ。怪しいものじゃないから、警戒しない

でくると嬉しいな」

怪しんでた？ そんなつもりはなかったんだが。

うむ、反省しよう。

「珂澄さん、まだ起きてないんだ。ごめんね」

「何があつたんですか…… って、オレが聞いていいか分かりませんけど」

そして夙夜はすでに知っているようだが。

「仕事で少し…… 酷い怪我じゃあないんだ。ご心配なく」

なんとなく含みのある言い方に首を傾げたが、それは後から夙夜に聞けばいい。

しかし、仕事絡みとは。珂澄さん自身は国家権力だと言っていたが、実際どんな仕事なのだろう？

一瞬躊躇、だが、この話の流れなら聞かない方が不自然だろう。

「珂澄さんの仕事ってそんな危険なんですか？」

そう問うと、河野さんはうーん、と首を捻った後、

「それは僕から言えないかな」と答えた。

ごめんね、という笑顔に、夙夜と同じ種類の鈍感さを感じる。

「そう言えば、夙夜くん、いったいどうして珂澄さんが怪我したって分かったの？ 本部や僕からは、まだ夙夜くんの方には連絡してなかったはずなんだけど…… あ、もしかして実家から連絡あった？」

「……うん」

夙夜が曖昧に頷く。

なんとなく、何となく感じていた事ではあるが、夙夜は『実家』とやらとうまくいっていないらしい。まあ、珂澄さんに養われているという事実を考えれば簡単にたどり着ける事実ではあるのだが。普段感情を見せない夙夜が先ほどの電話から驚くほど動揺しているのが分かって、こっちが焦るくらいだ。

しかしながら、きつといま聞いても『あとでね』と言われるのは必至だったので、やめておく。

「でもよかった、そろそろ職場に連絡したかったんだ。代わりに珂澄さんについていてあげてくれるかな？ 何かあったらそのボタ
ンね」

河野さんはにこりと笑い、ナースコールを指さした。

河野さんが出ていった部屋で、オレはとりあえず軽く息をつく。
先輩はベッドを隠すように掛けられていたカーテンをかきわけ、
その向こうに消えていった。珂澄さんの事は先輩に任せておけば大
丈夫だろう。

さてと。

オレの中はいま現在、夙夜に問いただしたい事でいっぱいだぜ。

「おい、夙夜」

「なあに、マモルさん」

しかし、あまりに疑問符が多すぎて、いったい何から聞いたらいいの
か分からねえ。

じゃあまず、差し迫った問題から行くか。

「さつき、オレに手伝えって言ったな」

「うん」

「その理由を簡単に話してくれるか？」

そう尋ねると、夙夜はへら、と笑った。

いつもと同じ笑顔だった。

まさか、と、思うのだが。

「やっぱちよっと待った」

夙夜を止めておいてから、オレは頭痛を催し始めた頭に手を当てる。

おいおい、マジかよ。

マジでまだそのパターンを引っ張る気なのか？

「また、珪素^{シリカ}生命体関連なのか？」

白根の方で手いっぱいだったのに、珂澄さんの方までそこに帰着

するのか？

「ごめんね、マモルさん」

夙夜の気合の入っていない謝罪に、オレは大きくため息をついた。
逃れられない、って言ったのは自分じゃねえか。

白根の組織『稲荷』^{イナリ}からも雁字搦め、^{ガンジガラ}夙夜の方も逃げ道なし。学校へ行っても生物教師となった望月がいるだけだ。

嗚呼、どこへ行く、オレの日常。

「珂澄さんはね、実は珪素^{シリカ}生命体関連の仕事してるんだけど、あ、アオイさんとは別ね。どうやら、仕事の時に珪素^{シリカ}生命体と遭遇して怪我しちゃったらしいんだ」

「……で？」

「うん、それがこの付近でさ。俺がこれまで気づかなかったってことはここへ来たのはほんとにさっきくらいだと思う。だから——」

「探すのはオマエの役目だろ」

「うん。たぶん見つかると思う」

この野郎、あっさり言いやがって。

「俺はね、知りたいんだ。叔母さんは、珪素^{シリカ}生命体を捕まえようとしたわけじゃないはずだ。もちろん、傷つけるはずない」

「だろうな」

「だから、会って、話したいんだ。その時は、マモルさんも一緒にいてほしいな」

「……」

とりあえずオマエはそのホモくさい言葉選びを何とかしろ。

04 : 最後の登場人物

結局、珂澄^{カスミ}さんは目を覚まさず、オレと先輩は病院を後にすることになった。

夙夜は珂澄さんが起きるまで病院に残る、とのことだった。

付き添っていた同僚だという河野^{コウノ}さんと連絡先を交換した時に、何かあつたら直接連絡するよ、と言っていたのが微かに引っ掛かった。

家族や親類といった類の話を聞いたことはないが、叔母である珂澄さんに養われていることから夙夜のソレが世間一般的なモノとはかけ離れている、という結論にはすぐにたどり着ける。本人が話したがるか、知らなければオレ自身に被害が出る、というわけでない限り問いただす気もないが、多少気になる事は気になる。

河野さんはそのあたりの事情も分かっているようだし、珂澄さんの同僚という事は国家権力（珂澄さん曰く、だ）の一部なのだろうから多少は安心できるだろう。

ただちよつと頼りない印象を受けるのは我慢するとして——って、オレは何様だ。

病院を出ると、うつとおし梅雨の曇り空がオレたちの頭上に広がっていた。雨が降り出すのは時間の問題だろう。

「マモルちゃん、おなかすいたのです。アオイちゃんのところに行ったん戻って、お昼ごはんに誘うといいのです」

「え、白根を誘うんですか？」

「ワタシはもういいのですけど、マモルちゃんはまだ知りたい事がいっぱいあるのでしょうか？ シュクヤくんはいませんが、先に聞いておいてもいいと思うのですよ」

「……」

そりゃあ、オレだつてまだまだ知りたい。

白根の所属する組織について——『稲荷^{イナリ}』という、神社を母体とする組織である事以外はほとんど分かつていないのだ。それも、彼女の様子からすると、まだまだ情報が引き出せそうなのだ。これを逃す手はない。

「……いいよな、夙夜？」

おそらく病院の前で話しているこの会話だつて聞いているであろう同級生にぼつり、と呼びかけて。

「じゃあ、白根のマンションに戻りましょうか」

「はいですう」

にこにこと笑う先輩と二人、病院に背を向けて歩きだした。

マンションへと向かう途中には、アーケードの商店街の中を突っ切る必要があつた。

駅に近づくにつれ、道行く人が増えていく。今日は休日、天気はそれほど良くないがこれから梅雨が本格的に始まる時期、最後のお出かけを楽しむ人も多いのだろう。

「アオイちゃんとお話が終わったら、お買い物がしたいのです。マモルちゃん、一緒にきてくれませんか？」

「ええ、いいですよ。何買うか知りませんけど」

気を抜いていると対面から歩いてくる人にぶつかりそうになる。

「先輩」

オレは先輩に手を差し出した。

「ふふ、デートみたいなのですう」

「ぼーっとしてると跳ね飛ばされますよ、先輩」

冷たく返したのだが、先輩は嬉しそうににこにこと手をとった。肩のあたりで先輩の髪がふよふよと揺れる。

「お買い物の時も手をつないで歩きたいのです」

「あー、はいはい。いいですよ」

抵抗するのも面倒だ。

駅前のアーケード、時刻も昼に近付いてにぎわっている商店街は人にあふれている。

どこにでもありそうな休日の風景だった。

ああ、日常だ。

心のどこかでほっとしている自分がいる。

しかし、そう簡単には逃れられないのがオレの不幸体質ってやつだ。

そろそろ気づくべきなのだ。白根の告白、珂澄さんの怪我、そして街に再び珪素生命体が——これだけ伏線をはっておいて、オレの周囲に何も起きないはずはない。

もし夙夜や白根が言うように、珪素生命体シリカが同族の残滓に惹かれるっていうのが本当なら、再びこの街に現れた珪素生命体シリカがどこに現れるのかなんて、すぐに分かったはずなのだ。

梨鈴、イズミ、シリウス、そして望月と共にいた名もなきキツネの珪素生命体シリカ。

オレにはかつて在った珪素生命体シリカの痕跡が次々と刻まれていく。

だから、これは偶然でなく必然。

銀色の髪をした何かが、遙か道の先ですつと雑踏に消えたのは。見間違いかと思い目を凝らすと、人ゴミの隙間から、今度ははっきりとその銀色の髪をした何かが姿を見せた。

そして、これは勘違いでも何でもなく、ソイツはオレの方を睨みつけていた。

「——?!」

小柄な体格。身につけているのは地味な色の7分パンツにバツシユ。帽子をかぶっている様子はなく、射抜くような視線がオレに向かつて投げかけられていた。

違う。

珪素生命体シリカがこんなところにいるはずがない。

先輩がきゅっとオレの手を強く握った。

「……シリウスくん？」

そして小さな唇から漏れた言葉。
違う。

そんなはずはない。

だってアイツは――

最上の笑顔を残して消えた、ネコの珪素生命体^{シリカ}。

ふい、と銀髪の少年は人ゴミへと紛れていく。

「あ」

先輩の手を振り払えるはずもなく、雑踏に消える銀色の髪を見送った。

二人を包む沈黙。ここだけ、雑踏の中で世界を切り取ったかのようだ。

何しろ、だって、振り向いた銀髪のアイツは。

「シリウスくんにとってもよく似ていたのです」

「……そうだったかもしれませんね」

なあ、頼むから。

「でも、いまのは珪素生命体^{シリカ}じゃなくて人間ですよ。こんな場所に
いるはずはないですから」

「だと思つのですけど、でも、珂澄さんは……」

これ以上、オレの周囲をかきまわさないでくれ。

先輩の言葉を断ち切るように、オレは足を進めた。

「先輩、行きましよう。いまは、そっちよりも白根の方が先です」

そして、首を傾げる先輩を強引にその場から引き剥がした。

覚悟をして飛び込んだ世界は、オレを受け入れた。

それどころか、逃すまいと食指を伸ばして雁字搦め。

こうなつたらもう、堕ちるところまで堕ちればいい。

狭間でもがいた道化師は、ついに世界に捉えられた。
ここから先は共演、狂宴。

一つだけ空いていた椅子を埋め、最期の瞬間を迎えるのみ。
そこに待つ、奈落の結末を見届けるため。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2193n/>

無関心の災厄 —— サイプレス

2010年11月20日21時40分発行